平和への一歩

今からちょうど８０年前の１９４５年８月１５日、日本は終戦を迎えました。その後日本国憲法が制定され、三大原則の一つである「平和主義」のもと、日本では８０年間戦争が起きていません。戦争のない日本で生まれ育った私たち。戦争のない日本にやってきて安心して暮らしている私。日本に戦争があったことは知っていても、８０年という時間は私たちにはとても長く感じられ、戦争はどこか現実味のないものに思えていました。私たちの「平和学習」は、あたりまえのように思っていた「今」を見つめ直すことから始まりました。

まず私たちは、平和学習語り部ボランティアの須田英典先生にお話を聞きました。そのお話の中で、私たちが住む斐川町にも戦争があったことを知りました。戦争が激化する中、斐川町には平らで広大な新川跡地があり、急いで基地をつくるのに適していたため大社基地がつくられました。爆撃機「銀河」が４０機以上配備され、３度の出撃により９名の方が命を落とされたそうです。大社基地がつくられたことで、斐川町は空襲が増え、何人もの命が失われました。通学路にある段原鉄橋には今も銃弾の跡が残っており、私たちのふるさとにも確かに戦争があったことを実感しました。戦時中の日本にはどこにも安全な場所はなかったのだと、とても怖さを感じました。

また、斐川町に集団疎開してきた大阪の子どもたちの様子についてもお話を聞きました。家族が恋しくて、毎晩布団の中で泣いている姿があちらこちらで見られたそうです。また、疎開先のお寺から逃げ出して自力で大阪へ帰ろうとした子どももいたそうです。私は、大人だけでなく子どもたちも戦争をしていたのだと思いました。そして、戦争は体だけでなく心も壊すものだと感じました。帰る家があり、「ただいま」と言ったら「おかえり」と返ってくる私の毎日が、どれだけ幸せなのか実感しました。

地域の方からは、戦時中の体験談を聞かせていただきました。当時の子どもたちは、勉強はほとんどできず、軍事工場や畑で働いていたそうです。配給制のため満足に食事がとれず、畑から大根やジャガイモを盗んで食べていたという話や、靴はぜいたく品のため、暑い日も寒い日もどんなにつらくても、裸足で歩くしかなかったという話を聞きました。戦時中は、子どもであっても守られる存在ではなく、自分の力で必死に生きていたのだと、想像する度に心の痛みを感じました。私た

ちがあたりまえのように思っていたことは、戦争のもとでは決してあたりまえではありませんでした。

私のひいおじいさんの弟も志願して兵隊になり、沖縄の海で人間魚雷として身を捧げました。私は、出撃するときの死を覚悟する気持ちとはどんなものなのだろう、自分の命をささげてまで勝たないといけない戦争とは何だろうと思いました。

私たちは戦争について学び、その悲惨さや苦しみに触れました。今の私たちの暮らしは、多くの命が犠牲となり、苦しみの中で平和を願い続けた人々の強い思いによって築かれてきたものです。戦争のない日々は決してあたりまえではありません。私たちがあたりまえだと感じていた毎日は、本当に「有ることが難しい」からこそ「有難い」のです。だからこそ、家族と過ごせること、友達と笑い合えること、勉強できること、ご飯が食べられること、そんな日々の中にある小さな幸せを大切にし、守り続けていかなければなりません。しかし今も、世界では戦争や紛争が続いています。本当に戦争によって得られるものに意味や価値があるのか。戦争が最善の解決策なのか。戦争を知らない私たちだからこそ、過去の事実と目の前の現実に向き合い、知ろうとし続けることが大切だと思います。命の重さや尊さを想像し、戦争の歴史を語り継ぎ、そして、生きたくても生きられなかった命があったことを忘れず、今を大切に生きようと思います。

「平和」とは何でしょうか。自分の命も相手の命も大切にすること、言葉を大切にすること、違いを認め合うこと、よく考え正しく知ること、自然や環境を大切にすること。答えは、まだ分かりません。私たちは、これからも平和学習を続ける中でその問いと向き合い続け、自分なりの答えを探し続けていきたいと思います。それら一つひとつが、どこかでつながり、平和への一歩になることを信じて。

令和７年８月３日

出雲市立中部小学校６年

佐藤　友哉　　三原　麻生　　山根　起子

元井　寧々　　遠藤　咲月　　多久和　桜典

シメネス　ユミ